

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「考える人」は、動かない

神奈川県立相模原中等教育学校 3年 滝澤^{たきざわ} 咲歩^{さほ}

信号のない横断歩道を渡ろうとすると、すぐに車が止まってくれる。迷子になって道を尋ねれば、快く教えてもらえる。歩いていて何か物を落としても、たとえそのことに気付かなくても、後ろを歩く人が拾ってくれる。今、私たちが生きているのは、そんな、優しさに満ちた世界だ。

しかし、それ故、私たちは人任せになってしまっているのではないだろうか。他の人が行動するのを、我関せずと眺めてはいないだろうか。

先日、私は駅のホームで電車が来るのを待っていた。電車が到着する旨のアナウンスが流れた時、「誰か！」と悲鳴が聞こえた。私には何が起こったのか見えなかった。だが、その声色から、助けを求めているのは火を見るよりも明らかだった。

これほど遠くまで届くような叫び声を発することなど、そうそうないからだろう。私の周りにいた人は一人残らず、「何事か」と声のした方へ目を向けた。それなのに、誰一人としてその場を動かなかったのだ。私から見える範囲にいた数十人、その皆が皆、何食わぬ顔をしてやって来た電車に乗り込んでいた。

既に誰かが助けているだろうから、自分が動いたって無駄だ。下手したら、ただの野次馬になりかねない。もしかしたら、そんなふうを考えていたのかもしれない。わからなくはない。しかし、それが「他人を当てにした無責任な考え方」に思ってしまうのは、私だけだろうか。「考える人」は一步も動かない。

あの悲鳴は、ただの傍観者にとって「他人事」でしかなかったのだ。道を渡る時に車が止まってくれるのとは違い、相手の顔が見えない。そのせいで、自分とは関係がないように感じられるのだ。「誰かが何とかするだろう」と期待して、その「誰か」が他ならぬ自分自身であるべきだという可能性を、これっぽっちも考えていない。

要するに、当事者意識がない。相手の視点に立とうとしない。だから、自分一人で行動を起こしたところで何も変わらないと思っている。

でも、何も変わらないなんて、そんなことはない。当事者意識を持ち、相手の目線から考えるだけで、変わることもある。

障がい者や高齢者が目の前に立っているのを尻目に、席に座ってスマホに視線を注いでいる人がある。電車の中で、しばしば、見かける。ときおり、そんな光景が優先席で見られたりもする。そして恐らく、彼らは自分の前に立つ人の存在に気付いているのだ。

席を譲るべきだとはわかっているけれど、面倒くさい。断られるのが怖い。自分も疲れているのだから、座っていたい。そんな声が聞こえてくるようだ。

こんな時、「他の人が譲らないかな」なんて考えはすぐに捨てて、当事者意識を持つといい。相手の目線になってみればいい。きっと、自分でも驚くほどあっさりと、席を譲ることができるだろう。そして誰かの笑顔が一つ増える。

もし断られたら、あの人は座りたくなかったんだな、と開き直っていいと思う。相手も当事者意識を持っているとは限らないのだから。

小さい頃から「困っている人がいたら助けましょう」と散々言われてきた私たちは、だけど、「当事者意識」の「と」の字すら、教わった覚えがない。お年寄りや障がい者には席を譲りなさい、車椅子利用者が段差に困っていたら手伝いなさい。そうやってうわべだけしか学んでこなかったけれど、今になってようやく、本当に大切なことがわかった。

当事者意識を持つ、つまり、相手の目線に立つこと。そんな些細なことで、世界は変わる。変えられる。たとえ一步ずつだろうとも、いつの間にか千里の道を進んでいるはずだ。